妊娠から分娩，乳幼児期にいたる疾患の追跡的データに基づく母児健康管理システムの研究

神奈川県立栄養短期大学
須　川　　豊

私たちの調査研究は，永年継続している異常児発生要因調査，すなわち妊娠時から成長の経過を追跡する調査の結果の分析から，先天異常の発生防止や，周産期死亡の予防をはじめ，子どもを健やかに育てる母子保健行政の効果的なあり方を策定することを目的としている。

今回の報告は，その追跡調査の分析の一部追加と母児健康管理システムの一試案である。

この試案は，なお詳細な施行体制が研究されねばならないし，他の方法および現行方式との比較検討も必要である。

なお行政の第一線における保健婦の妊産婦指導のための指針を作成中であるが，具体性の配慮を重視している。

(1)　周産期死亡のリスク条件

北里研究所附属病院　産婦人科
小　林　　英　郎

研究目的

周産期死亡の減少対策は，周到な妊娠・分娩・新生児管理にあることは当然であるが，現今のようにセンター方式が充実して来ると，病院間の母児の移送，特にそのタイミングが重要な問題になって来る。その移送を行う決断をするについても，また，患者を重点管理下に置くについても，妊娠初期から新生児期に至る様々な時点で，患者の状態を評価しなければならない。その際，risk factorをチェックすることも重要な作業になるが，それぞれのfactorに重みづけができ，更に判別式的なものができるならば，一般臨床家にとっても，判断の一助になるものと考えられる。そこで，そのrisk factorの周産期死亡への寄与の程度や，判別式作製の可能性を探るため，今回の研究を行った。

研究方法

11498件の単胎・生産・正常児を対象群としやはり単胎の陣痛発来以前の胎児死亡（以後分娩前死亡）51件，分娩中の胎児死亡（以後分娩中死亡）27件，早期新生児死亡77件について分析した。また，最近の新生児管理の進歩に伴い，新生児の死亡時期が遅れる傾向が出て来ていることも考慮し，出生第8日から第28日迄の後期新生児死亡23件についても，参考資料として検討した。これらについて，父・母の妊娠前からの項目，母の妊娠中の生活状況，臨床経過，分娩時の状態および新生児期の状況を，それぞれの状態に応じて分類を行い，頻度または平均値等に関して比較検討し，更に，relative riskの算出をした。

研究結果

(1)　周産期死亡率

出生全数14,920件に対し，双・三胎も含めた死亡数は，胎児死亡86件，早期新生児死亡90件，合計176件で，その周産期死亡率は，出生1000に対し11.8である。

(2)　対照群と差の認められたrisk factor

表1に，死亡群と対照群の間で，risk factorの出現率に差の認められたものをリストアップした。factorとして検討した項目は，父については，年令，体格，血液型，経過した疾病，奇形等の遺伝的情報，母については，昭和52年度厚生

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

私たちの調査研究は,永年継続している異常児発生要因調査,すなわち妊娠時から成長の経過を追跡する調査の結果の分析から,先天異常の発生防止や,周産期死亡の予防をはじめ,子どもを健やかに育てる母子保健行政の効果的なあり方を策定することを目的としている。

今回の報告は,その追跡調査の分析の一部追加と母児健康管理システムの一試案である。この試案は,なお詳細な施行体制が研究されねばならないし,他の方法および現行方式との比較検討も必要である。

なお行政の第一線における保健婦の妊産婦指導のための指針を作成中であるが,具体性の配慮を重視している。